

「天の声」

マルコの福音書 1:9～11

はじめに

「…イエスから目を離さないでいなさい。(ヘブル人への手紙 12:2)」と聖書は言います。なぜ私たちはイエシュアに目を留めなければならないのでしょうか。どこにその必要性があるのでしょうか。またイエシュアに目を留める時、そこには何があるのでしょうか。今回はそのような問いかけを持ちながら、イエシュアについての御言葉を読み解いていきたいと思えます。

1. ガリラヤのナザレ

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。

イエシュアはガリラヤの町ナザレから来られました。なぜガリラヤのナザレだったのでしょうか。この地名が指し示す意味とメッセージを考えてみたいと思えます。まずガリラヤは、ヘブル語でゲリーラー(גליל)と言ひ、このように表記しますが、単なる地名、固有名詞というだけでなく、本来は「土地、領土、地境」という意味で使われる言葉です。その最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

ヨシュア

13:1 ヨシュアは年を重ねて老人になっていた。【主】は彼に告げられた。「あなたは年を重ね、老人になった。しかし、占領すべき地は非常にたくさん残っている。

13:2 残っている地は次のとおりである。ペリシテ人の全地域、ゲシュル人の全土。

これは預言者モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民が、荒野での40年の放浪生活を経て、約束の地カナンに入った後のことです。モーセの後を継いだヨシュアに導かれ、イスラエルの民はカナンの全土に展開し、自分たちの領土を広げていきました。しかし時は流れヨシュアが老年になってもまだ「占領すべき地は非常にたくさん残っている。」と神は告げられました。その「残っている地」であるペリシテ人の或いはゲシュル人の「全地域、全土」と訳されているのが聖書で最初のガリラヤ、ゲリーラーです。ここで「残っている」と訳されているシャーアル(שָׂרָא)は本来「生き残る、生存する」という意味の動詞です。また神はこのガリラヤ、ゲリーラーを「占領すべき地」すなわち所有する、相続すべき地とも呼んでおられ、イスラエルの民が地を受け継ぐ、支配するという意味合いが、この言葉には表されていると考えられます。ですからガリラヤという地名には、イエシュアはイスラエルの民を滅ぼすのではなく生かし、そして地を所有させる、受け継がせるために来られた方であるということが指し示されていると考えられます。

そして次にナザレという町について。この町は旧約聖書には登場しておらず、福音書において初めて登場する、歴史的にも比較的新しい町であると考えられます。ヘブル語でこのナザレ(נָצְרֶת)は、ネーツェル(נֶטְעַל)「若枝、新芽」という意味の名詞の派生語と考えられ、文字通りの若い町、新しい町という印象がうかがえます。ですからこのネーツェルの最初の言及からナザレという名前が指し示す意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

イザヤ書

11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

これは預言者イザヤの預言です。「エッサイ」とはイスラエルの王ダビデの父の名です。その根から生える「若枝」、これがネーツェルです。ダビデはイスラエルの王の代表的存在、ユダヤ人の王の象徴であると言えますから、ネーツェルにはそのような意味合いがあると考えられます。そしてイザヤはこの「若枝」ネーツェルがどのような王であり、何を成されるのかということ、続けて以下のように預言しています。

11:2 その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。

11:3 この方は【主】を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、

11:4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。

11:10 その日になると、エッサイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまるところは栄光に輝く。

11:12 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

このように、エッサイの根から生えた「若枝」ネーツェルは「主の霊」を宿した王であり、国々を統治する御方であり、「イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる」イスラエルの王、ユダヤ人の王であることが示されています。ですからイエシュアがナザレから来られた、ナザレ人と呼ばれることには、イエシュアがイザヤをはじめ多くの預言書に記されたメシアについての預言の成就としての存在であることが指し示されていると考えられます。

このように、イエシュアが「ガリラヤのナザレからやって来た」のは、

- ①イスラエルの民に地を相続させ、所有させるため
- ②全世界に散らされているイスラエルの民をご自分のもとに集め
- ③国々を統治するために来られる王、メシアについての旧約の預言の成就である

ということが指し示されていると考えられます。

2. ヨハネのバプテスマ

そしてそのイエシュアが「ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。」という事実についても考えてみましょう。まずヨルダン(יַרְדֵּן)はヘブル語のヤーラド(יָרַד)「降りる、下る」という動詞の派生語であり、「主は人間…を見るために降りて来られた。」(創世記 11:5) という出来事に本来の意味があることを以前述べました。これはイエシュアが天から、神のみもとから人のところに降りて来られた御方であることを指し示す重要な地名です。ですからヘブル語の視点で考えるならば、イエシュアがバプテスマを受ける場所は、絶対にヨルダン川でなければならなかったと言えます。そしてそこでイエシュアは「ヨハネからバプテスマを受けられ」ました。以前この「バプテスマ」については述べました。ヘブル語ではターヴァル(טָבַל)「浸す」という動詞がこれに当たり、その本来の意味は水ではなく「血に浸す」(創世記 37:31) こと、すなわち死に関わることを意味し、これが身代わりとなって死なれるイエシュアの十字架による死を指し示していると述べました。では「ヨハネ」にはどのような意味があるのでしょうか。この名前は人が名付けたものではなく、神が御使いに命じてつけさせたものです。

【新改訳 2017】

ルカの福音書

1:13 御使いは彼に言った。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。

ですからこの名前に意味がない、何のメッセージもないわけがありません。それをヘブル語の視点から考えてみますと、この「ヨハネ(יְהוֹנָתָן)」はハーナーン(חָנָן)「恵む、あわれむ」という意味の動詞の派生語であると考えられ、その最初の言及は創世記 33:5 にあります。

【新改訳 2017】

創世記

33:3 ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。

33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

この箇所はアブラハムの子イサクの子であるエサウとヤコブ（イスラエル）が長い年月を経て再会する場面ですが、ここでヤコブは自分の妻と子どもたちについて、神がハーナーン「恵んでくださった」と言っています。つまりハーナーンとは本来、ヤコブの妻と子どもたち、すなわちイスラエルの家の者、イスラエルの民を指し示す言葉であると考えられます。このことからイエシュアが「ヨハネからバプテスマを受けられ」たことにはイスラエルの民、ユダヤ人によって殺される、イエシュアの十字架の死が表されていると考えられます。

3. 三つの出来事

1:10 イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。

ここには三つの出来事がまとめられて記されています。それは①「イエスは、水の中から上がる」こと、また②「天が裂け」ること、そして③「御霊が鳩のようにご自分に降って来る」ことです。これらの出来事が指し示す意味をそれぞれ考えてみたいと思います。ではまず①について。バプテスマを指すヘブル語ターヴァルは、死を意味すると述べました。ですからこの「水の中から上がる」とは、イエシュアが死から上がる、つまり死からよみがえることが指し示されていると考えられます。さらにここで「上がる」と訳されているヘブル語はアーラー(אָרָר)は本来、「地から湧き上がる」ということを意味しています。

【新改訳 2017】

創世記

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

2:6 ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

これは神の天地創造の御業の最初の状態を描いた記述ですが、ここで「豊かな水が地から『湧き上がり』」と訳されているのが聖書で最初のアーラーです。そして湧き上がった水は「大地の全面を潤していた」とあります。これらのことから「イエスは、水の中から上がる」とは、イエシュアの十字架の死とそしてよみがえりの事実が全世界に宣べ伝えられることを指し示していると考えられます。

次に②「天が裂け」ることについて。ここで「裂ける」という意味で使われているヘブル語はパータハ(פָּתַח)という動詞で、創世記 7:11 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

7:10 七日たつと、大洪水の大水が地の上に生じた。

7:11 ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた。

7:12 大雨は四十日四十夜、地に降り続いた。

これはノアの箱舟の物語の一場で、箱舟がついに完成し、いよいよ滅びをもたらす大洪水が始まる場面です。「天の水門が『開かれた』」と訳されているのが聖書で最初のパータハです。このようにパータハとは本来、大洪水によって地上の全ての生き物が滅ぼされたような、終わりの時、滅びを指し示す言葉であると考えられます。マタイの福音書において、イエシュアはこのように述べておられます。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。

このように、先ほどの①「イエスは、水の中から上がる」ことと、この②「天が裂け」ることが指し示す意味がイエシュアの御言葉と見事に合致します。ちなみにイエシュアはこの「終わり」について、同じ箇

所で「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難」(マタイ 24:21) と述べておられます。

そして最後に③「御霊が鳩のように…降って来る」ことについて。「御霊」はここであえて「鳩」のような姿をとられました。「鳩」を意味するヘブル語、ヨナー(נֹיָר)の最初の言及からその指し示す意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

8:8 またノアは、水が地の面から引いたかどうかを見ようと、鳩を彼のもとから放った。

8:9 鳩は、その足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を伸ばして鳩を捕らえ、自分がいる箱舟に入れた。

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地の上から引いたのを知った。

8:12 さらに、もう七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

これもまたノアの箱舟の物語の一場面です。150 日間に及ぶ、地表の全てを水没させた大洪水は、ついに終わりを迎え、ノアはここでヨナーすなわち「鳩」を放ちます。それは「水が地の面から引いたかどうか」、すなわち地上から全ての悪が一掃され、滅びが完了したことを意味しています。そしてそれは同時に新しい地、新しい時代の幕開けをも意味しています。確かに私たちの生きているこの世界、この時代は今も刻一刻と滅びに向かって進んでいます。それは全ての人々が必ず死ぬこと、命には終わりがある事に表されています。しかし滅びとは全てが終わり何もなくなってしまうことではありません。神は滅ぼそうとすると同時に新しい世界を起こそうとしておられるのです。つまり神はイエシュアによってこの世界を終わらせ、そしてイエシュアによって新しい世界を建て上げようとしておられる事がこの「鳩」に示されていると考えられます。

また「鳩」は「足を休める場所」を探す存在として記されていることから、これがイエシュアの上に降りて来たという出来事の中に、イエシュアこそが、イエシュアのみそばに、イエシュアとともに生きる場所こそが真の「休める場所」であることが表されていると考えられます。聖書全体を通して、御霊は様々な人に下り、その人に御言葉を語らせたり、御業を行わせたりしていることが記されています。しかしこのように、御霊が「鳩」のように降りて来るという出来事はイエシュアのこの一度限りです。ですから③「御霊が鳩のように(イエシュアに)降って来た」こととは、イエシュアこそが、ただこの御方だけが全ての悪を滅ぼし、悪しきこの時代を終わらせ、そしてイエシュアとともに生きる新しい地、安息の地、すなわち神の国を建て上げ、始められる御方であるということを表していると考えられます。

このように、これら三つの出来事に関するヘブル語アラー「上がる」、パータハ「裂ける」、そしてヨナー「鳩」のそれぞれの最初の言及は、この後イエシュアによって引き起こされる出来事を表しており、それはこの世の終わりとして新しい地、神の御計画の完成である神の国にまで至ります。またこれら三つの最

初の言及はいずれも「水」に関する出来事である事が解ります。ここにヨハネが『水で』バプテスマを授けた」意味、その理由があると考えられます。

4. 二つの言葉

1:11 すると天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

天におられる御父である神は、御子であるイエシュアに対して①「愛する(子)」、また②「喜ぶ」と声を発せられました。それぞれの言葉の持つ本来の意味について考えてみましょう。まず①「愛する(子)」について。これはヘブル語ではヤーディード(אָדִיר)という名詞が使われています。この最初の言及は申命記 33:12 にあります。

【新改訳 2017】

申命記

33:12 ベニヤミンについては、こう言った。「【主】に愛されている者。彼は安らかに主のそばに住まい、主はいつも彼をかばう。彼は主の背中に負われる。」

この言葉は、「神の人モーセが、その死を前にしてイスラエルの子らを祝福した、祝福のことば」(申命記 33:1)の一部で、ベニヤミン族に対して語ったものであり、「主に愛されている者」という部分に聖書で最初のヤーディードがあります。そしてそれは「主のそばに住まう」者のことであると記されています。ここで「住まう」と訳されているヘブル語シャーハン(שָׁחַן)の最初の言及は、エデンの園とそこに生える永遠の命の木を指し示しています。

【新改訳 2017】

創世記

3:24 こうして神は…いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

「ケルビム」とは、神の乗り物とも呼ばれ(サムエルⅡ 22:11) 御使いの中でも神の最も近くで仕え、常に行動を共にする存在として度々聖書に記されています。それが「エデンの園の東に『置かれた』」という箇所にはシャーハン「住まう」という言葉の持つ本来の意味が表されていると考えられます。それはすなわち、かつてアダムとその妻エバがエデンの園においてそうであったように、神とともに永遠に生きることです。なぜなら神は永遠に生きておられる御方であり、その御方とともに生きる者が永遠でないはずがなく、また永遠のいのちの木を守るようにシャーハン「住まう、置かれる」者が永遠に生きないはずがないと考えられるからです。このように①「愛する(子)」ヤーディードには、神のみそばで永遠に生きる、住まう、置かれる者という意味があり、またイエシュアご自身がそのような存在であるというだけでなく、エデンの園に表された、神と人が共に住まう場所である神の国を回復させる、完成させる御方であるということが指し示されていると考えられます。

そして次に②「喜ぶ」ことについて。ここではラーツァー(הצִיַר)という動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

33:3 ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。

33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。

33:8 するとエサウは、「私が出会ったあの一群すべては、いったい何のためのものか」と尋ねた。ヤコブは「あなた様のご好意を得るためのものです」と答えた。

33:9 エサウは、「私には十分ある。弟よ、あなたのものは、あなたのものにしておきなさい」と言った。

33:10 ヤコブは答えた。「いいえ。もしお気に召すなら、どうか私の手から贈り物をお受け取りください。私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです。兄上は私を喜んでくださいましたから。

この出来事は先ほども取り上げたエサウとヤコブの再会の場面です。かつてヤコブは兄エサウと父イサクを騙し、次男でありながら長男の受けるべき長子の祝福を奪いました。エサウは弟のヤコブを殺そうとするほどに憎みますが、長い年月が彼を変えたのでしょうか、エサウはヤコブを「喜んで」受け入れます。ここにラーツァーの最初の言及があります。ヤコブはそんなエサウを見て「神の御顔を見ているよう」だと言っています。ですからラーツァーとは本来、神との和解、関係の回復を指し示す言葉であると考えられます。これはヤコブがエサウから憎まれたように、イエシュアが神の怒りの対象となったことを指していると考えられます。しかしそれはイエシュアが罪を犯したということではなく、イスラエルの民の全ての罪をイエシュアが一身に背負われたが故です。ヤコブは神に足を打たれましたが（創世記 32:25）、イエシュアは十字架によってその命を打たれました。しかしその三日目によみがえらされたイエシュアは天に昇られ、今は神の右の座におられ、すなわち神との関係が回復しておられます。これらの出来事がラーツァーという言葉のもつ本来の意味の中に表されていると考えられますが、そればかりでなく、このイエシュアこそが神と人の和解、関係の回復をもたらす存在であることも指し示されていると考えられます。新約聖書には、イエシュアがその和解のための存在であることが、いくつもの箇所ではっきりと記されています。

【新改訳 2017】

ローマ人への手紙

5:10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。

5:11 それだけではなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を喜んでいます。キリストによって、今や、私たちは和解させていただいたのです。

エペソ人への手紙

2:16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。

コロサイ人への手紙

1:20 その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとくださったからです。

1:22 今は、神が御子の肉のからだにおいて、その死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。あなたがたを聖なる者、傷のない者、責められるところのない者として御前に立たせるためです。

このように、神が天からイエシュアに向かって「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」と語られた言葉の中には、

- ①エデンの園に表された、神と人が永遠にともに住まう場所の回復、神の国を建て上げること
- ②イエシュアの十字架の死によって神と人の関係が回復する、和解すること

が指し示されており、神の御子であるイエシュアが、御父である神にとってどのような存在であるかというだけでなく、イエシュアが何を成し、何を成し遂げようとしておられるのかということが指し示されていると考えられます。また、注目すべきことに、それらは全て 1:11 「すると天から声がした。」とあるように、天におられる御父である神から、直々に発せられたものであるということです。それはつまり「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」という御言葉の中に表されたイエシュアの成し遂げようとしておられることは全て、天におられる御父である神から発せられた神の御心、み旨、すなわち神の御計画であることが表されていると考えられます。

5. 神の御計画

このように、私たちは聖書を学び、そこにイエシュアの存在について、またはイエシュアの語られた御言葉、歩み、なされた御業を見出す時、それらは全て天におられる御父である神のご計画そのものであり、それ以上でもそれ以下でもなく、省かれたものでも付け加えられたものでもないことを知るはずです。イエシュアに語らせ、事を行わせるもの、それはただ「天からの声」の主である御父である神の御心、ご計画のみです。ここに私たちがイエシュアに目を留める必要性があるのです。つまり御父である神は、御子イエシュアの中に御自分の計画を全て集約しておられるので、イエシュアを通してのみそれらを知ることができるので、もし神の御計画がどのようなものであるのかということを知りたいのならイエシュアに目を留めなさいと言っておられるのだと考えられます。昨今、多くのクリスチャンがイスラエルを訪れ、当時イエシュアが実際に立たれた場所に立ち、歩まれた道を歩いています。しかし私たちが知らなければならぬのはイエシュアがどのような御方で、どこに行かれ、何を成されたのかということではなく、そのイエシュアの存在と言動に表された神のご計画を知ることなのです。ですから私たちは聖書の中にイエシュアを見出し、これに目を留め、そしてそこに表された神のご計画を知る者とさせていただけるよう、日々御父である神に求めてまいりましょう。御子イエシュアの御名によって祈り求めてまいりましょう。